

4. 中山間地域における住民主体の地域づくり

～若者を呼び込む住民と移住した若者の協働による課題解決の可能性～

松本市地域づくりインターン第5期生・入山辺地区担当 平林 洸

はじめに

現在、中山間地域は、多くの地域課題を抱えている。これは戦後の高度経済成長を経た産業構造の変化に端を発する。1950年に48.5%と半数近くを占めていた第一次産業の割合は1960年に32.7%になった。第三次産業は1960年には、38.2%と第一次産業の割合を超えた。それが2015年になると、第一次産業が4%、第三次産業は71.9%と第三次産業主体へと大きく産業構造が変わっている¹⁾。これは、人々は中山間地域での第一次産業主体の暮らしから、職を求めて、第三次産業の集積する大都市を中心とした暮らしへと転換したことによるものである。

これまで農業を基本としていた中山間地域の生活スタイルが機能不全を起こし、生活をしていく事が難しくなった人々は中山間地域から離れていくことで人口減少が生じた。地域の人口減少によって課題解決に向けたマンパワー不足が生じ、状況を打開する見通しを持つことができなくなるという負の循環が生まれつつある。

こうした中山間地域の課題を解決していくために必要なものとは一体何だろうか。私はこのことについて、松本市入山辺地区を中心として、実践活動に取り組みながら考察することとした。

第1章 中山間地域を取り巻く現状

ここでは、中山間地域の現状と抱えている課題について整理していくこととしたい。

1節 中山間地域の概要

一般的に中山間地域は、「地方」や「農山漁村」と同義として使われている場合が多く、小田切徳美は「地方部の都市的な地域を除く地域を「農山村」とし一漁村も含む一、その中でも山がちな地域を「中山間地域」とする²⁾と定義しており、本論文でもこの定義を使用する。また農林水産省では、以下のような定義を定めている。

「中山間地域とは、山間地及びその周辺の地域、その他地勢等の地理的条件が悪く、農業生産条件が不利な地域をいい、農林統計上用いられている地域区分のうち、中間農業地域と山間農業地域を合わせた地域を指しています。山地の多い日本では、このような中山間地域が総土地面積の約7割を占めています。

この中山間地域における農業は、全国の耕地面積の約4割、総農家数の約4割を占めるなど、我が国農業の中で重要な位置を占めています。」

中山間地域の農業・農村が持つ土の流出を防ぐ機能(土壌侵食防止機能)、土砂崩れを防ぐ機能(土砂崩壊防止機能)などの多面的機能は、国民の大切な財産です。

図1 農林水産省HP：中山間地域等についてより抜粋

このように、中山間地域であるかどうかは、行政区分として明確に分けることはできない。しかし、中間農業地域及び山間農業地域を含む全国の市町村は1697箇所あり、この中に松本市も含まれている。また松本市は中山間地域等直接支払推進事業の対象地域として、独自に「中山、入山辺、本郷、内田、四賀、梓川、波田、安曇、奈川」における各地区を選出している。

中山間地域は第一次産業が中心の豊かな自然に囲まれた日本の原風景のイメージが例として挙げられていることが多く、里山など人と自然が共存しているエリアでもある。

2節 中山間地域の人口流出と発生した課題

現在、中山間地域の抱えている課題の例として、少子高齢化、空き家・耕作放棄地、地域の伝統文化の消失などを挙げることができる。これはサービス業主体の大都市を中心とした現代社会において、今までの農業主体の生活で育まれてきた生活や文化が、機能不全を起こしてきているからである。1960年頃

に日本の産業主体が第一次産業から第三次産業へと移り変わり、職を求めて地方から都市圏への人口流出が続いた。このことから2014年に出された『成長を続ける21世紀のために「ストップ少子化・地方元気戦略」』内でまとめられた、いわゆる「増田レポート」では、過疎が進む地方、特に中山間地域は、対策を講じなければ、2040年までに半数の自治体が消滅する可能性があるとして報告された。この増田レポートの中では、各地で引き起こされる地域の機能不全や課題は、人口減少がその原因としており、増田氏は大都市圏への一極集中と少子化への早期の対策が必要と論じている。

この中山間地域で抱えた課題とは何であろうか。増田レポートでは人口減少をその課題としているが、小田切徳美は著書のなかで、その課題を「誇りの空洞化」としている。「いま、農山村には多面的な問題が発生している。特に中山間地域を対象として、その問題状況を整理すれば、「人」「土地」「むら」という三つの空洞化と表現できる。」³⁾とまとめている。人が都市部へと流出することで「人の空洞化」が発生し、そこから段階的に管理する人間の居なくなった土地や空き家が増える「土地の空洞化」、町会などの地域維持機能の衰退を指す「むらの空洞化」が発生しているというのだ。さらに「しかし、以上のプロセスの解明を追跡しながらも、こうした変動は事態の表層に過ぎないと筆者は認識している。深層では、より本質的な空洞化が進んでいるからである。それは、地域住民がそこに住み続ける意味や誇りを見失いつつあること、つまり「誇りの空洞化」である。」⁴⁾とし、地域に対する愛着や自分たちの暮らしに対しての誇りが失われてきていることこそ課題であるとした。たしかに、自分たちの住んでいる地域の価値を見出せず、誇りを持つことができなければ、その地域をより良くしていこうとする地域づくりはできない。

山下祐介は、自らの著書の中で「一般に農村・地方のほうが出生率は高く、大都市圏・首都圏で低いという事実を認めるのなら、人口を集めるべきは地方中核都市ではないはずだ。地方中核都市からさらに地方の中小都市へ、そしてさらには農山漁村へと押し戻すことが本来あるべき方策である。そのほうが効果的であり、また理想でもある。」⁵⁾と論じている。確かに、農山村や中小都市などの地方から大都市圏へと人口が流出していったなら、人口の逆流を起こせばいいだろう。しかし、人口の逆流を起こすに

ても、中山間地域に入る移住者もその地域に魅力を感じなければ移住しない。この魅力とは、小田切のいう地域住民の地域に対する誇りと考えられる。またこの魅力が無ければその後の定住に結びつかないだろう。

3節 中山間地域に移住する若者

近年、都市部から中山間地域への移住を希望する若者が増加してきている。地方のとりわけ中山間地域の暮らしに魅力を感じ、また都市部での暮らしに不満を抱えた若者が増加しているのである。下の図2は、NPO法人ふるさと回帰センター（東京）に対して、中山間地域への移住についての問い合わせ等をした人の数の推移である。

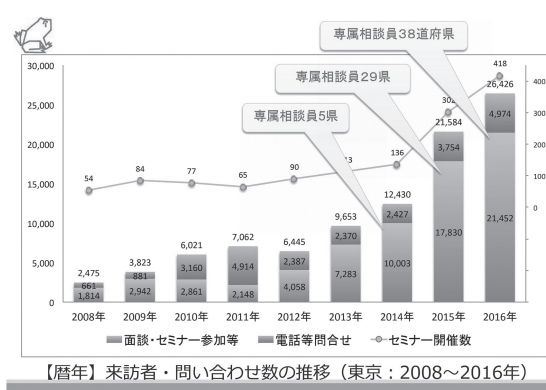


図2 2017地方移住の現代的意義～移住相談から見る田園回帰～より抜粋

上記のデータからは、2014年から2016年にかけて大きく増加していることがわかる。またこの移住希望者たちは、総務省が2018年に過疎関連都市へ転入した人を対象に実施したアンケートの結果⁶⁾をみると20～50代が大半を占めている。これは定年退職後の「終の棲家」としての移住ではなく、若者の新たな生活の拠点として移住を求めていることがわかる。また、この年齢層は中山間地域で求めている若者と同年代であり、マンパワー不足をすぐに解消できることから中山間地域を含む自治体は注目しており、全国的にこの層をターゲットとして移住者支援に取り組み始めている。この移住者たちは同アンケート内での「ご自身の体験を踏まえ、都市部から農山漁村地域への移住者を増やすために必要だと思う支援や有効だと思う取組などがあれば、ご記入ください」という設問に対し、①「就業・就労支援」、②「住宅支援」といった生活に直結する実利的な問題が上位3項目にある中で、③「地域の魅力アップや地域情

報の発信」も、20代・30代・50代における上位3項目に入っている。

①・②に関しては行政的側面が強く、各自治体が就労支援や補助金、空き家バンクの運用などに取り組んでいるが、③についてはその地域で暮らしている住人の情報や取り組みが重要になってくる。また、こうした地域の魅力アップや地域情報の発信に取り組んでいくことで、自分たちの必要性や役割を持てるようになり、失われた地域に対しての誇りを取り戻すことができるのではないだろうか。さらに、地域情報の発信については、地域内のこういったものに魅力や価値を見出すのか、どうすればそれらの魅力や価値を的確に発信することができるのかを理解している人材が必要になる。今後は魅力ある地域づくりと並行してそうした人材が必要になるのではないだろうか。

4節 仮説

前章での検討を踏まえ、若者が魅力を感じる地域づくりと、地域の魅力アップと情報発信を行う人材について、以下の観点から取り組むことができないかと考えた。

①地域住民による主体的な地域づくり

地域住民が自ら地域課題や魅力的な価値について考察し、それらを利用した地域づくりに取り組むことで、中山間地域の課題として挙げた「誇りの空洞化」の解消につながるのではないだろうか。

②地域づくり活動に参加する若者の発見ときっかけづくり

地域情報を発信するために実際に地区の情報を必要としている移住希望の若者たちに伝えられる人材を発見、育成が必要ではないだろうか。その地域で暮らしている若者や移住した若者が、①のような活動に参加できるきっかけづくりが必要なのではないだろうか。

私は、以上のような仮説をたてて、松本市における中山間地域のひとつである入山辺地区を中心として事例研究と実践活動を行うこととした。

第2章 事例研究

住民が主体となって地域づくり活動に取り組んでいる中山間地域の事例として、松本市入山辺地区における「入山辺地区の将来ビジョンを考える会」(以下、本会の愛称として用いられているこんな山辺にするじゃん会と表記する。)を調査した。ここでは入

山辺地区と、こんな山辺にするじゃん会の活動から、中山間地域での課題解決方法の可能性を考察する。

1節 松本市入山辺地区の概要



図3 入山辺地区から中心市街地方面を見下ろす風景(包石集落付近)

入山辺地区は松本市の東部に位置し、中心市街地から車で15分ほどの場所にある。薄川を中心に集落が点在している。集落のある地区の標高は660m～1400mほどと標高差が大きく、入山辺地区地域づくりセンターから南北に広がる地区で、同じ地域内であっても地区伝統行事や食文化等に違いが見られる。入山辺地区の面積は76.66km²で95%が山地である。農業が主産業であり、特産品のブドウは「山辺ぶどう」としてブランド化され、また山辺ワイナリーが醸造したワインは全国的な品評会で入賞している。

入山辺地区の人口は昭和26年に3864人いたが、平成31年4月1日時点で1979人と約半減している(図4)。入山辺地区の人口ピラミッドを見ると高齢者が特に多いハンマー型となっている(図5)。出生率は2.5%で松本市35地区中最下位(図6：平成30年7月1日時点)、高齢化率は46.2%で松本市35地区中2位(図7：平成31年4月1日時点)と非常に少子高齢化の進んでいる地区である。

2節 住民主体での地域づくりに取り組む「こんな山辺にするじゃん会」の活動

現在こんな山辺にするじゃん会は地区の内外会員を合わせて114名(令和元年度5月現在)である。会則は以下のとおりである。(平成31年度時点)

入山辺地区人口推移

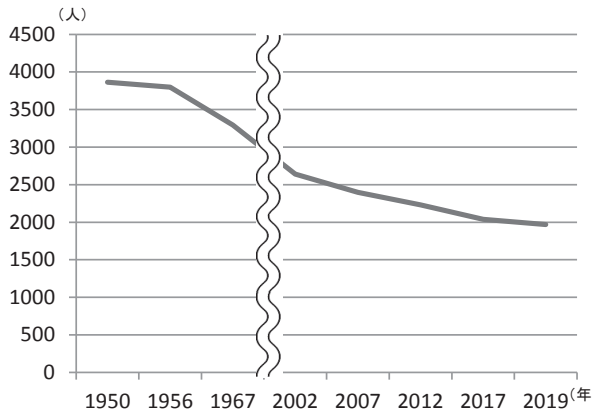


図4 松本市地区別年齢別人口及び入山辺文化誌より作成

入山辺地区の人口ピラミッド

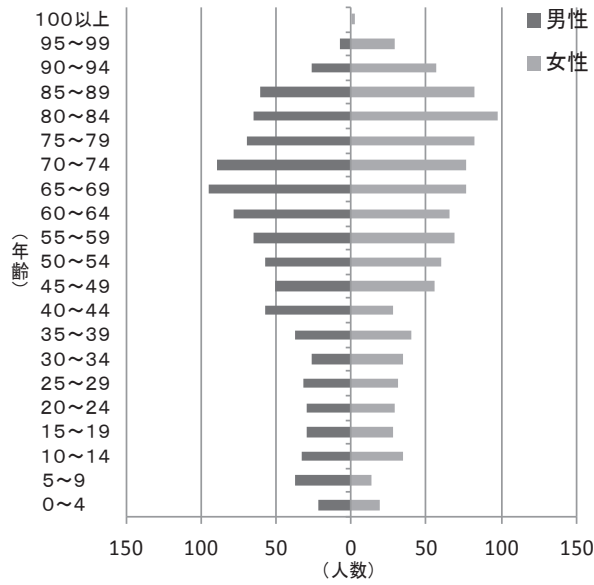


図5 入山辺地区診断書より抜粋

市内35地区の出生率

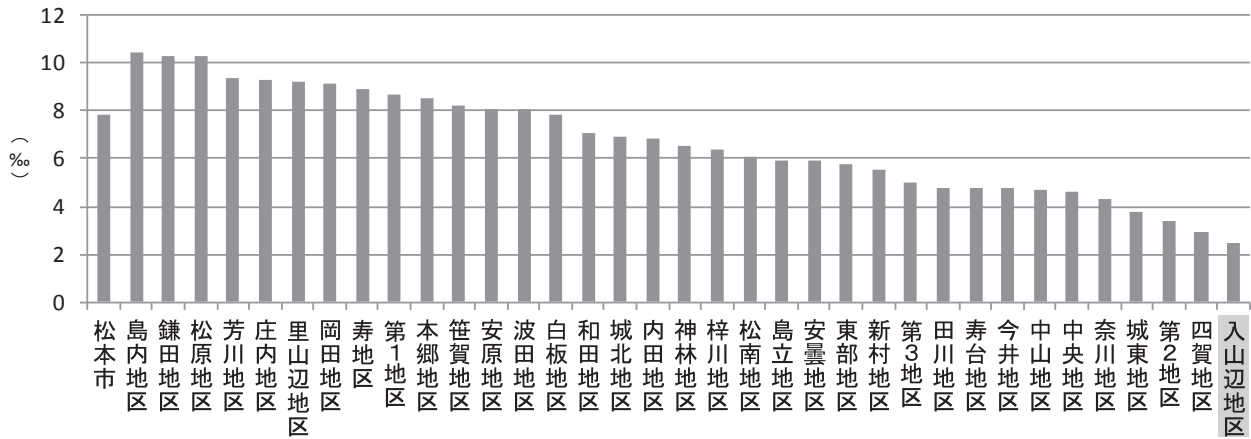


図6 入山辺地区診断書より抜粋

市内35地区の高齢化率

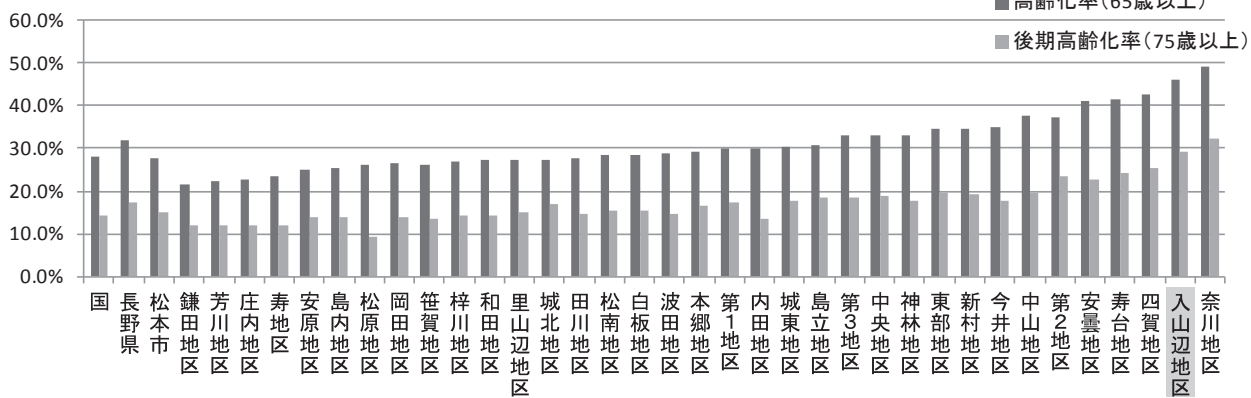


図7 入山辺地区診断書より抜粋

<p>入山辺地区の将来ビジョンを考える会会則</p> <p>(名 称)</p> <p>第1条 この会は、「入山辺地区の将来ビジョンを考える会」と称する。(以後「この会」とする。)愛称は「こんな山辺にするじゃん会」とする。</p> <p>(組 織)</p> <p>第2条 この会は、有志公募会員を持って組織し、必要に応じて課題解決のための専門部会を設置することとする。</p> <p>2 この会の会員は入山辺地区の活性化に関心のある人とし、随時入会できるものとする。</p> <p>3 会員の任期は、本人からの辞退の申し出が無い限り続くものとする。</p> <p>4 事務局は、松本市入山辺地区地域づくりセンターにおく。</p> <p>(目 的)</p> <p>第3条 この会は、会員相互の連絡調整を図り連携を深めることをとおして、将来の地区のあり方を考え、地域課題の解決に向け具体的に行動していくことを目的とする。</p> <p>(事 業)</p> <p>第4条 この会の目的達成のため次の事業を行う。</p> <p>(1)入山辺地区の課題解決に関すること</p> <p>(2)関係機関との連携を取り、具体的な課題解決のための計画策定と実施に向けて行動すること。</p> <p>(3)会員相互の連絡調整を図り、連携を深めること。</p> <p>(4)その他目的達成のため必要なこと。</p> <p>(活 動)</p> <p>第5条 この会の事業を進めるにあたり地区内の各組織や住民が主体となって、行政関や大学と連携を図り、住んでみたい訪れてみたい入山辺を目指す活動を行う。</p> <p>(役 員)</p> <p>第6条 この会に次の役員を置く。</p> <p>(1)会長 1名</p> <p>(2)副会長 5名</p> <p>(3)グループ長 若干名</p> <p>(4)会計 1名</p> <p>(5)監査2名</p>	<p>(役員の選出)</p> <p>第7条 役員の選出は、この会において決定する。</p> <p>(役員の任期)</p> <p>第8条 役員の任期は、2年とする。但し、再任を防げないものとする。また、役員の任期は、本人から辞退する旨の申し出がない限り続くものとする。</p> <p>(役員の職務)</p> <p>第9条 役員は次の職務を行う。</p> <p>(1)会長は、この会を代表し、会務を統括する。</p> <p>(2)副会長は、会長を補佐し、会長事故あるときはこれを代行する。</p> <p>(3)グループ長は、各グループを統括する。</p> <p>(4)会計は、会長の命を受けて会計を処理する。</p> <p>(5)監事は、本会の事業及び会計を監査する。</p> <p>(会議)</p> <p>第10条 この会の会議は、総会及び役員会とする。</p> <p>(会議の開催)</p> <p>第11条 総会及び役員会を開催することができる。</p> <p>(会議の相集及び議長)</p> <p>第12条 定期総会は年1回とし、必要に応じて会議はすべて会長が召集し、会長が議長となる。</p> <p>(経費及び負担金)</p> <p>第13条 この会の経費は、町会連合会助成金及びその他の収入をもってあてる。</p> <p>(会計年度)</p> <p>第14条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日をもって終わる。</p> <p>この会開は、平成24年6月12日から施行し、平成24年度から適用する。</p> <p>この会則は、平成25年4月9日から施行する。</p> <p>この会則は、平成26年5月13日から施行する。</p> <p>この会則は、平成28年5月10日から施行する。</p> <p>この会則は、平成30年5月8日から施行する。</p>
---	--

図8 こんな山辺にするじゃん会会則

(1) 発足の経緯

こんな山辺にするじゃん会は、平成23年8月に開かれた市政まちかどトークと、その後の入山辺地区民生・児童委員の一人の呼びかけに端を発する。平成23年に入山辺地区民生・児童委員の一人が、当時入山辺地区の地域づくりの実情を分析した結果、地域内で少子高齢化が想像以上に進行していたこと、各町会長や地域内の入山辺地区町会連合会、入山辺地区町内公民館長会、その他関係各種団体は機能しているものの、今後の担い手が不足することが課題であることが明らかになった。さらにその町会役員や団体において、職務を全うする人が多いが、任期制という意識が強く、各団体同士の連携がほとんどなかったことも明らかになった。そして同年の8月、入山辺地区の実情と要望を市長に伝え、地域住民同士で地区について討議する「市政まちかどトーク」が開催された。ここでは地域住民からの市長への要望が出されるとともに、市関係部署とのフリートークが実施された。そのフリートーク内の議題として挙げたのが「超少子高齢化を迎えた中での魅力ある地域づくりについて」である。この議題をめぐる議論が、会議に参加した住民に、解決すべき重要な地域課題として意識づいた。そこで町会長をはじめ、地域にかかわる各種団体長や地域づくりセンター職員を含めた他地区でのまちづくり協議会のような横のつながりをつくっていこうということになり、地域課題解決について議論・活動していく団体「入山辺地区の将来ビジョンを考える会」を発足させた。その後、松本市の地域づくり課を仲介して顧問的なアドバイザーとして松本大学の白戸洋教授(2015年から向井健専任講師もくわわる)を招くこととし、勉強会を重ね本格的に活動を開始することになった。



図9 H24年 白戸教授との勉強会の様子

(2) こんな山辺にするじゃん会の活動

現在は大きく4つのグループに分かれて活動を行うこととし、毎月第2火曜日に定例会を開催して、地域づくり活動の提案・運営予算決定・活動報告等を行っている。発足当初は、1年間かけて会の正式名称「入山辺地区の将来ビジョンを考える会」の通り、こういった入山辺地区の将来像を望んでいるのかを話し合い、地区の課題共有と将来ビジョンを明確化することに力点が置かれた。参加者全員が数名ずつの班に分かれ、地域資源や地域課題を出し合った。その資源や課題を類型化し、どのように活用できるか、解決できるかを検討し「住んでみたい、訪れてみたい入山辺」を標語に、グループごとに活動することとなった。以下の3つが当時発足したグループである。

①「観光と魅力発信グループ」

目的：入山辺地区の住人同士も別の集落名の読み方や情報がわからないといったことに対して、地域に対して愛着を持ってもらい魅力を共有



図10 入山辺の藤棚とそこから見える眺望案内板設置の様子



図11 入山辺のさんぽ制作メンバー

して内外に発信していけるような活動に取り。

③「食農振興グループ」

目的：遊休農地活用と農作業を通じて地域の内外との「わ」を広げ、若い世代に情報や経験を継承していく活動に取り組む。



図12 田んぼのわプロジェクト



図13 みんなのSOBAで楽し味隊

④「住みやすい地域づくりグループ」

目的：入山辺らしい景観の整備と暮らしやすい環境を整え入山辺の住人が元気になれるような活動に取り組む。

①の「観光と魅力発信グループ」は当初、前述した他の集落の読み方や場所が分からないといった声があったことから、入山辺にある山辺ワイナリーの敷地内に入山辺地区案内看板を設置した。この時は案内看板の支柱を町会数と同じ13本使用し、各柱に町会名と入山辺地区で行われる町内運動会の時に使用する各町会のイメージカラーを使うなど、入山辺地区全体の結束が表れるようなデザインとした。そのほか入山辺地区の町会は13であるが、集落としては25あり、その集落の入口に集落名案内板を建てた。



図14 地区内の高齢者の憩いの場「ゆめ食堂」



図15 会員同士の親睦を深めるサロン赤ちょうちん

この事業では実際に作業した会員でも、作業するまでその存在を知らなかった集落もあったという。

②の食農振興グループは、地域内で所有者の高齢化により、維持管理できなくなった農地が遊休農地として放置され、いずれ耕作放棄地として荒れてしまい再生林化してしまうことを防ぐことと、地域内外の人々が農作業を通じて地域の農業の中で培われてきた技術や経験を伝えながら、地域内外の人たちの交流のわをつなげることを目的として活動をスタートした。その中でソバの栽培とソバ打ちを行う「みんなのSOBAで楽し味隊」、もち米の栽培と餅つき大会を行う「田んぼのわプロジェクト」が行われた。これらの活動は、令和元年度現在で6年目を迎え、継続中の活動である。そのほかにも中山間地域と中心市街地の交流のため、松本城下町の上土町で5月から11月にかけて農産物の販売活動をしている。また入山辺地区の特産品であるブドウの商品開発も行い、干しブドウが商品化された。現在は、松本市上

土町で5月から11月頃にかけて毎週木曜日の午後、入山辺産の農産物の販売を行う「上土ふれあい新鮮市」を開催している。

③の住みやすい地域づくりグループにおいては、地域内の花壇整備や除草作業をはじめ、入山辺地区福祉ひろばと連携した送迎ボランティアや高齢者の孤食が地域の中で課題として挙げたため「ゆめ食堂」(図14)として昼食会を行っている。また会員の交流を深め、地域にあるJA交流センターの活用を目的として「サロン赤ちょうちん」(図15)を開催している。

若者向けイベントとして、「入コン」といういわゆる街コン企画を開催、また平成26年度には地域の中にある空き家を集計して移住希望者等に提案できる空き家対策活動も行われたが、現在はどちらも活動を休止している。

以上が初期に立ち上がったグループである。また現在は、新たにDIYグループが組織され活動している。このDIYグループは当初防災用のロケットストーブを作り、試運転を兼ねてサロン赤ちょうちんで焼肉をしたことが好評で結成された。その後燗製器やドラム缶を利用した移動組み立て式ピザ窯、灰ころがしおやき器を作成し、公民館事業や各種地区行事の際に活用している。



図16 令和元年度新規作成灰ころがしおやき器「おやきじゃん」

3節 こんな山辺にするじゃん会の“意識共有と誇り”

地域づくりインターンに着任して以来、1年間にわたってこんな山辺にするじゃん会に参加した結果、この会の特徴として、意識共有と会員たちが誇りを持って活動していることが挙げられることが見えて



図17 地区防災訓練で移動組み立て式ピザ窯「じゃんドラ君」にて炊き出しを行う様子

きた。意識共有については、会の立ち上げから1年間地区の課題や魅力、それについて自分たちができることを話し合い、共通認識として明確にしたことが大きい要因となっている。こんな山辺にするじゃん会全体での大きな意識共有と、グループ内で取り組む活動の意識共有とがなされたことで円滑な活動が実行できるようになっている。

こんな山辺にするじゃん会では、地域に対しての誇り、また地域活動に参加している自分自身への誇りが醸成されつつある。こんな山辺にするじゃん会での活動の成果が入山辺地区内で表れ始めているからである。観光と魅力発信グループによる集落案内看板の設置や入山辺の散歩発行など、形として成果が目に見えるものや、ゆめ食堂やサロン赤ちょうちんなどで新たな交流が生まれるなど、各グループ活動の変化が表れてきている。こうしたことにより会員たちが地域や活動に取り組んできた自信に対して誇りを持つことができています。

4節 これからのこんな山辺にするじゃん会について

これからこんな山辺にするじゃん会を1章4節の仮説にから見た場合、以下の2点が必要になるのではないだろうか。

- ①こんな山辺にするじゃん会の広報活動の拡充
- ②こんな山辺にするじゃん会に若者が参加できるきっかけづくり

①こんな山辺にするじゃん会の広報活動の拡充

私が、入山辺地区において調査を開始した令和元年度は、会の情報は毎月の集まりの資料とSNS(ホー

ムページ、フェイスブック、ツイッター)で情報が共有、発信されていた。しかし、資料は集まりの参加者向け、SNSにはについては、ツイッターは活動休止中で、フェイスブックやホームページも限定的な情報であった。しかし、令和2年度市政広報番組「わたしたちの松本市 世代を超え笑顔でつなぐ地域づくり」の取材をきっかけとして会員の中で入山辺地区の魅力をより外部へ発信しようという機運が高まりつつある。入山辺地区やこんな山辺にするじゃん会が蓄えている魅力を、これからは必要としている人に届くよう、地域外に向けても発信していくことが課題である。

②こんな山辺にするじゃん会に若者が参加できるきっかけづくり

こんな山辺にするじゃん会では、現在、若者を地域に取り入れようとする活動は、食農振興グループの活動のみである。平成26年度には移住者向けの空き家紹介に関する活動や入コンといった活動が行われていたが、現在は休止中である。また、その他のグループでの活動に対し参加者呼びかけを行っているが新規会員につながるような活動は取り組まれている。こんな山辺にするじゃん会活動のような中山間地域での活動に興味ある若者を呼び込むためのきっかけづくりが必要なのではないだろうか。

第3章 実践活動報告

中山間地域の課題とこんな山辺にするじゃん会の課題解決に関する活動として、以下のことを実施した。

1節 こんな山辺にするじゃん会広報活動の拡充

こんな山辺にするじゃん会の課題として挙げた広報活動を拡充するため①「地域外向きの広報」と、②「地域内向きの広報」に分けて実践した。

①「地域外向きの広報」SNS等を利用した情報発信

観光と魅力発信グループで管理していたホームページとSNSについて、管理していた会員と協力し、複数人で管理できる体制を模索した。今までは、こんな山辺にするじゃん会でのイベントの参加募集について投稿していたが、これからはそれと併せて地域内の魅力的な行事などを発信する内容を含め、内容と発信の機会の拡充を図った。入山辺地区原・厩所町会で行われている炭焼きや、各町会で行われているお祭り、入山辺地区文化祭の様子などを投稿す

ることにより、入山辺地区での暮らしをイメージしてもらいやすくなり、観光や移住として入山辺を訪れる人への情報提供の拡充を図った。

また、約3か月に1回、こんな山辺にするじゃん会だよりとして、こんな山辺にするじゃん会の活動報告や地域の魅力を紹介するチラシの発行を始めた。毎月、全戸配布される広報まつもとと各地区のお便りと一緒に全戸配布することにより確実に届き、SNS等の利用を敬遠する住民たちへの広報方法として有効であると考え実施した。結果として、入山辺地区にある滝に関する情報を掲載した際、こんな山辺にするじゃん会での活動は行っていない地域住民から、掲載記事を見て追加情報の提供があった。こうした地域内に潜在している人材、資源発見のためのツールとして今後も運用をしていく。

②「内向きの広報」山辺ワイナリー前掲示板を利用した地区の魅力発見

観光と魅力発信グループが山辺ワイナリーに設置した「入山辺地区案内看板」には、毎月の入山辺での行事や風景写真の掲示がされている。この掲示板の写真は各町会から写真を集め、入山辺地区全体を紹介することを目的として設置されていたが、現在では公民館職員が用意した写真が主な掲示物となっている。従来における入山辺全体の紹介という掲示板の目的に加えて、地域住民や地域づくりインターンが撮影した地区内の写真を掲載することとし、入山辺地区の魅力を再発見するモデルケースとなるように取り組んだ。現在は地域づくりインターンとして企画をし、掲示しているが、これからは、入山辺地区の住民や、入山辺地区に訪れた観光客が撮影した写真も掲載できるように計画中である。

2節 若者の地域づくり活動へのきっかけづくり

1. 松本大学・日本大学・明星大学合同ゼミナール受け入れ

令和元年9月2日から3日間松本大学、日本大学・明星大学による合同ゼミナール(以下、合同ゼミナールとする。)が開催された。この中のグループワークとして、大学生に入山辺地区とこんな山辺にするじゃん会の活動を紹介する、まちあるきと勉強会を実施した。外部からの若者を受け入れ、実際に地区での活動を見てもらいながらその活動から誇りを持った会員たちから話を聞くことで、地域づくりや入山辺地区に関わるきっかけを作り出すことと、若者の目



図18 こんな山辺にするじゃん会会員から説明を受ける大学生



図19 入山辺地区を歩きつつ地域課題や魅力を探す大学生

線から入山辺地区を見てもらうことで、入山辺地区の魅力の再発見や、新たな課題の発見を目的とした。参加した学生からの意見は以下の通りであった。

良かった点
●景色・川・空気がきれい。
●インスタ映え(写真撮影)スポットが多い。
●地域の方々が温かかった。
●ウォーキングマップがわかりやすい。
●看板(集落案内看板)にふりがながあって読みやすい。
●鳥、動物避けがしっかりされていた。
●野菜がとっても美味しい。
悪かった点
●歩道がない上に、白線のギリギリまで草が生えている。(薄川沿い舟付橋より下流南側道路)
●トイレ、自販機が少ない。
●看板が少ない。(簡易マップ等)
●上から見える景色やポイントを看板化してほ

しい。
●ごみがたくさん捨てられていた。(パノラマラインふじ棚にたばこの吸い殻多数、薄川沿いにごみの入ったビニール袋)
●休憩所が少ない。
●車のスピードが速すぎて怖い。(和田線包石付近)
改善点
●道祖神の説明看板が欲しい
●「ごみを捨てないで」の看板を増やしてほしい。
●ごみ捨て防止の看板が色あせていた。

図21 松本大学・日本大学・明星大学^{めいせい}まちづくり合同ゼミナール結果報告より一部修正

この合同ゼミナールによって、若者たちが地域の課題や魅力発見を行うことで、地域づくり活動参加への興味を持つきっかけとなった。また、地域住民では日常となっていて気付かなかったたばこの吸い殻などのごみや路上まで伸びている草などの課題につながり、後日清掃活動や除草作業が実施された。

2. 猟友会を利用したきっかけづくり

若者の中山間地域に関わるきっかけとして、猟友会に着目して調査をすることとした。猟友会は、狩猟者のための公益団体として運営されており、社団法人日本猟友会を最上部組織として、末端は地区とほぼ同領域で組織される支部で構成されている。本来の目的は「狩猟道德の向上、野生鳥獣の保護、有害鳥獣駆除及び狩猟の適正化を図り、もって狩猟の健全な発達と生活環境の改善に資すること。」⁷⁾となっているが、実際の活動を見ると、地区で抱える野生鳥獣被害対策に取り組む地域づくり団体という側面がある。野生鳥獣被害という地域課題は、入山辺地区をはじめとした中山間地域で抱えている。

農林水産省のまとめによると、農作物の被害額は減少傾向にあるが、いまだその被害額は150億円を超えており、看過できない地域課題である。

こうしたことから、猟友会は、農作物被害という地域課題に対して、最前線で取り組んでいる地域づくり組織といえる。また、猟友会での活動は基本的に先に挙げたように、地区とほぼ同じ範囲の支部単位で活動しており、その地区で暮らす住民が加盟している。したがって、新たに若者がその地区に入った場合、暮らしや文化など地区の情報を伝える場としても活用できると考えた。このような組織を地域

野生鳥獣による農作物被害の推移(鳥獣種類別)

(単位:千ha、百万円、%)

		平成28年度		平成29年度		平成30年度		
		面積	金額	面積	金額	面積	金額	(シェア)
鳥類	カラス	3.7	1,618	3.0	1,470	2.6	1,425	(49.2)
	カモ	0.3	451	0.3	448	0.2	386	(13.3)
	ヒヨドリ	1.2	480	0.9	406	0.6	307	(10.6)
	スズメ	1.6	310	1.1	307	0.8	237	(8.2)
	ムクドリ	1.1	242	0.9	215	0.8	191	(6.6)
	ハト	0.6	124	0.3	102	0.3	99	(3.4)
	その他鳥類	0.7	260	0.4	252	0.9	251	(8.7)
	小計	9.2	3,485	6.9	3,200	6.3	2,897	(100.0)
獣類	シカ	42.8	5,634	35.4	5,527	35.8	5,410	(42.0)
	イノシシ	8.2	5,072	6.7	4,782	5.9	4,733	(36.7)
	サル	1.6	1,031	1.2	903	1.0	823	(6.4)
	ハクビシン	0.7	428	0.6	417	0.5	401	(3.1)
	クマ	0.8	387	0.8	389	0.7	383	(3.0)
	アライグマ	0.4	336	0.3	327	0.3	375	(2.9)
	カモシカ	0.1	182	0.2	158	0.2	134	(1.0)
	タヌキ	0.3	152	0.2	147	0.2	151	(1.2)
	ネズミ	0.5	64	0.4	124	0.5	72	(0.6)
	ウサギ	0.2	71	0.1	62	0.1	73	(0.6)
	ヌートリア	0.1	65	0.1	58	0.1	54	(0.4)
	その他獣類	0.5	255	0.4	293	0.3	271	(2.1)
	小計	56.0	13,678	46.3	13,186	45.5	12,881	(100.0)
	合計	65.2	17,163	53.2	16,387	51.8	15,777	

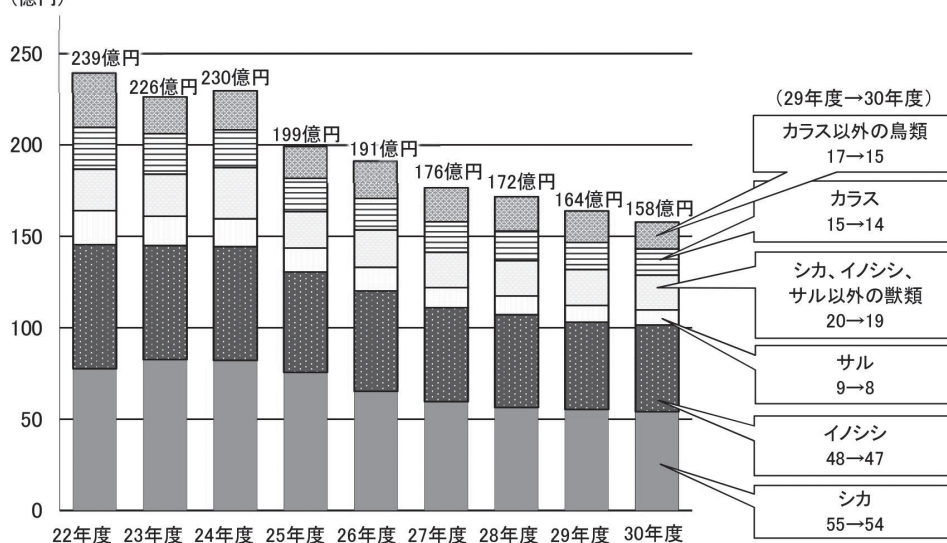
注1:都道府県の報告による(都道府県は、市町村からの報告を基に把握を行っている)。

注2:ラウンドの関係で合計が一致しない場合がある。

注3:「その他鳥類」にはキジ及びサギ、「その他獣類」にはモグラ、マングース、台湾リス及びキョンを含む。

野生鳥獣による農作物被害金額の推移

(億円)



注1:都道府県からの報告による。

2:ラウンドの関係で合計が一致しない場合がある。

図21 農林水産省野生鳥獣による農作物の被害の推移(鳥獣種類別より一部抜粋)

づくり活動参加の場所ととらえて、若者が地域活動にかかわるきっかけの場所としていくためにどうすればいいかを明らかにしていくため、松塩筑獵友会本郷支部を調査することとした。この本郷支部は19名中7名が20～50代の若者で、鳥獣被害対策のために活動している。なかには奈良県から松本移って活動している会員もいる。この会員は「一番、恵まれたのは“縁”。自分より何十歳も上の、職業も様々な社会人と仲間になったことに感謝している。地域の伝統や歴史も教えてもらえる(後略)。」とし、獵友会での活動が地域とのつながりを生み、若者の地域づくり参加の場として有用であると考えられる。

第4章 まとめ

1節 課題意識が共有された住民による地域づくり

仮説で述べた地域住民による主体的な地域づくりについて、こんな山辺にするじゃん会の事例研究の結果、中山間地域での課題解決の手法として実際に取り組まれており、課題解決の方法となっていることが分かった。地区の住民が、自ら課題や魅力を発見し取り組むことでその地域の将来ビジョンを明確に共有できると、地域に愛着や誇りを持ち、地域に関わる長い活動の中で、やりがいを持って活動することができるということが分かった。こうして地区に対する誇りや、それに関わる自身への誇りを持つようになることにより、中山間地域での課題であった「誇りの空洞化」が解消されていくのではないかと考えられる。

2節 若者が地域づくりに参加するきっかけに利用できるもの

若者が地域づくりに参加するきっかけづくりでは、実際に若者たちがその地域で活動できること、地域での暮らしや魅力、また課題が伝わるような活動が必要だと感じた。また、その後、地区に移住者として入る場合、合同ゼミナールの活動における、図20にあるように、地域の良さや課題を知るために実際に地区を見ることで、地域での暮らしをイメージできるようになることが分かった。

3節 来年度に向けて

今回の研究を踏まえたうえで来年度の活動として、
①若者の地域づくり参加へのきっかけづくり
②移住者を地域内に呼び込むための具体的事業の模索

③中心市街地と中山間地域の連携した地域づくり活動の模索

に取り組みたい。

①については、入山辺地区のこんな山辺にするじゃん会と獵友会を中心として、中山間地域での地域づくりに若者が参加するために何が必要かを継続的に調査していくこととする。

②については、現在こんな山辺にするじゃん会で計画されている移住者に関する取り組みに活動メンバーとして参加し、地域に移住者を呼び込むために必要な具体的事例を考察し実施する。また、そうして地区に訪れた移住者に対し、①についての働きかけができないか関連して活動していくこととする。

③については、来年度からの新規活動として、中心市街地の地域課題と中心市街地の抱える地域課題を地域資源として活用し、地域を超えて連携した活動を行うことで相互解決の方法を模索していく。これについては、中心市街地担当のインターンと連携して実施する予定である。

文献

- 1) 総務省統計局国勢調査時系列データより
- 2) 小田切徳美『農山村再生「限界集落」問題を超えて』pp.3(2009)
- 3) 小田切徳美『農山村再生「限界集落」問題を超えて』岩波書店 pp.1(2009)
- 4) 小田切徳美『農山村再生「限界集落」問題を超えて』岩波書店 pp.5-7(2009)
- 5) 山下祐介『地方消滅の罣「増田レポート」と人口減少社会の正体』筑摩書房 pp.50(2014)
- 6) 平成29年度第3回「田園回帰」に関する調査研究会資料3第2章過疎地域への移住者に対するアンケート調査
- 7) 大日本猟友会ホームページ「大日本猟友会について 猟友会とは 設立目的」(2020年3月29日閲覧)